（ 様式D－２ ）
（ 別　　紙 ）

令和６年度　海外派遣研究員研究報告書

令和 6 年 10 月 30 日

日本大学理事長　　殿
日 本 大 学 学 長　　殿

所　　属　　松戸歯学部
資格・氏名　　准教授　渡邊徳明

■本報告書の内容を公表することは，了承しております。
□本報告書の内容を公表することは，差し控えください。
※いずれかにチェックし（■）提出すること

令和６年度海外派遣研究員（短期 B）の研究実績を，下記のとおり報告いたします。

記

１　区　　分　　短期 B
２　研 究 課 題

オーストリアの首都ウィーンと周辺における中世遊戯の伝承・研究に関する調査

３　派 遣 期 間　　西暦　　2024 年　8 月 25 日　～2024 年 9 月 8 日
４　派　遣　先　　オーストリア

５　研 究 目 的

本研究を端的に表現すれば，現代のウィーンにおける中世文化受容の特色を分析することである。とりわけ具体的には，ウィーンの各美術館における中世展示にどの程度，遊戯についての資料や記述があり，それがどの程度にホイジンガの『ホモ・ルーデンス』(1938) 以来の遊戯論の影響を意識して行われているのかを明らかにすることを目指した。その際，ウィーンの中世文化研究は（同じ言語が使われているドイツのそれと異なり），同地で育ち活躍したフロイトの精神分析も積極的に取り入れ，意識によって捉えられない抑圧された無意識の情動を重視したと想定した。（ホイジンガにも同様の傾向があるが）情動を発散させる遊戯について論じるとき，遊戯論は無意識についての議論と絡み合ってくる。それは既存の社会の道徳的拘束からの解放であり，文化的インサイダーでありながら同時にアウトサイダーをも演ずる分裂的な意識状態である。その原動力として抑圧され隠された人々の情動を文化の形で昇華させようとする超自我的な作用が想定される。「中世的なもの」の強調に近代以降の理性重視で見落とされた社会のフラストレーションの発散が意図されていて，それはウィーンを都

としたハプスブルク帝国の伝統を引き継ぐものではないか，という仮説の妥当性を確かめることを目指した。

そのような構図を相対化して眺めるために，オーストリアの中世由来の周辺都市（グラーツ，リンツ，インスブルック）の美術館・博物館における諸展示との比較から，ウィーンに特有の中世的遊戯性の特徴を把握することを目指した。（例えばウィーンは現代芸術・現代思想の世界的拠点でもあり，おのずとその中世受容の性質も他の周辺都市とは異なることがある程度予想された。つまり，伝統的でありながら，保守性を上回るアヴァンギャルドな部分があり得ると考え，現代的な都会としての側面にも注目し，観劇なども計画した。）

６　研　究　概　要

①　研究の方法

オランダ人の文化史家ホイジンガの『中世の秋』(1919)は，中世の人々の生活における聖俗混交の日常を描くもので，中核にはキリスト教的な世界観の下での遊戯的かつ類型的な行動についての洞察がある。彼が活写したブルゴーニュ公国の中世後期の宮廷文化はオーストリアとスペインにおいて継承されたという。ドイツの中世研究においてホイジンガの『中世の秋』はさほど影響力を持たなかったとされるのと異なり，彼の中世に関する思想とオーストリア文化の親和性は強い。ウィーンでは近年，ホイジンガの著作・思想が意識的に取り上げられた。ホイジンガは日本では『ホモ・ルーデンス』(1938）の著者としても広く知られ，同書は遊戯論の古典であるが，ナチス政権によって強まった独裁的イデオロギーへのアンチテーゼとして出版された一面もある。そして彼の思想において「中世性＝遊戯性」というイメージ的結合があって，それは強制的で画一的な近代性へのアンチテーゼでもあった。

実証主義的観点からの中世文化研究がなされる傾向があるドイツに対して，オーストリアの中世研究は文化論的な色彩が強い印象があると私は考え，宮廷文化伝統を強く意識するウィーンの街の特色と中世文化の継承と研究とを，遊戯性の観点から考察した。

ウィーン美術史美術館・ベルヴェデーレ宮殿（美術館）などにおける中世芸術作品の所蔵について調査と資料収集を行った。特に，オーストリア最大の中世芸芸術コレクションが所蔵・展示されているベルヴェデーレ宮殿のリサーチ・センターで調査をし，学芸員の方からいろいろご説明と資料提供を頂いた。更に，首都ウィーンの文化の影響を強く受けているリンツやインスブルック，グラーツなどの都市についても，それぞれ日帰りで視察した。これらの周辺都市は帝国時代にウィーンの相似的ミニチュアとして発展した側面がある。主に博物館を中心に視察し，ウィーンにおける諸展示の特徴をより明示的に論じるための比較対象として，これら周辺都市の状況を把握した。

遊戯性の観点は，宗教やイデオロギーあるいは民族の違いによる対立を調和する，コスモス的な価値の共有による多様性の確保が，ウィーンさらにはオーストリア全体

の文化の中でどのように実践されているか，そしてそれがキリスト教中世世界の伝統とどのように関連しているか，という問題意識へと発展した。

②渡航先での活動内容

以下，現地で書いた備忘録の文面をなるべく生かして記したい。今回のオーストリアへの派遣においては，芸術作品が展示されている施設・街の様子や雰囲気そのものが，その文化的特徴を理解する上で重要と思うからである。

1. グラーツ市立博物館の展示を見学

ウィーンから 2 時間ほど列車で山ばかりの土地を抜けて行った。グラーツは中世以来の都市で，ムール川のほとりにある。15 世紀にはハプスブルク家の皇帝が都にした。城山に登り，頂上にある城の歴史を展示する博物館を見学。さらに麓に降りてグラーツ市博物館を見学。この博物館の中世の展示を見て，許可を確認し写真もたくさん撮った。ウィーンやインスブルックの街とは異なるグラーツの特徴がよく解説されている。

特に中世後期からバロック期にかけてのグラーツの宗教的な対立とインクルージョンを特集していていたことに注目した。ここでグラーツの中世におけるユダヤ系住民の状況をまとめた資料を購入した。旧教・新教の対立とともに，対オスマン･トルコの戦いの前線で，その装備が準備された街であり，そういう宗教的対立の舞台になった歴史は（チロル地方の）インスブルックには無かった，と解説で強調されていた。街並みで言えば，街を見下ろす川沿いの城山の砦，その近くに宮廷と大聖堂と旧市街地。そして川の向こうに駅。中世風の都の典型とも言える。ウィーン，インスブルックと並び，ハプスブルク家の宮廷があるところ，常に水源，防衛，統治，信仰，商業の要素をうまくまとめた街づくりがなされていることを再認識した。

2. ベルヴェデーレ宮殿リサーチ・センターでの調査

ベルヴェデーレ宮殿のリサーチ・センターで中世･ルネサンス担当の学芸員ビョルン・ブラウエンシュタイナー氏および職員さんが私の関係の資料を見繕って出してくださった。またブラウエンシュタイナー氏が下宮の中世コレクションに案内してくれた。この美術館の中世コレクションはオーストリア最大で，展示の運営方針など，いろいろ細かい話も伺った。ウィーンにおける中世文化継承が私のテーマだが，この同氏は，ベルヴェデーレ宮殿の前は美術史美術館にいた方で，両美術館の違いにもお詳しかった。

更にベルヴェデーレ宮殿は上宮と下宮とに分れていて，その役割は歴史的にも異なり，それが今の展示の仕方の違いにもつながっている。

2023 年には，ベルヴェデーレ宮殿の 300 周年で，ちょうど分厚い本が出版され，ブラウエンシュタイナー氏も寄稿していた。特に，ベルヴェデーレ宮殿がなぜ「オーストリア」にこだわるのか，ということを同氏は強く意識していた。最近の展示方式の変更や意図についても具体的に伺った。

3.連邦議会議事堂の見学

連邦議会議事堂を見学。パスポート提示と荷物チェックのみで入れ，英語の案内ツアーに参加。写真とり放題で，オープンさに驚いた。議会場の演説席で私が立っている写真を撮ってもらった。そこは大統領が演説する場所である。民主主義の中心である連邦議会のオープンさは，私自身が想像していた以上であったが，ちょうど一か月後には連邦議会の総選挙が予定されていたこともあり，町中に多くの選挙ポスターが貼られていて，一層のこと議事堂の見学は意義深く感じた。国民全員を代表する言論の府における伝統的な側面（これは帝政時代からの建物が使われている部分に象徴される）と，永世中立国であり国際性と議論の透明性を重んじる民主主義的な側面，の両方を見ることは，文化行政全般を理解する上で有意義であった。

4. インスブルックのアンブラス城および市内の見学

インスブルックでは，山の中腹にあるアンブラス城を見学した。ここはハプスブルク家の大公フェルディナントの居城として有名で，とりわけバロックの芸術品や調度品が多く展示されていた。ウィーンとグラーツの博物館や美術館においては，アンブラス城ほどにバロック的なものが強調されていない。この城は中世において既に建てられていて，その建物自体が残す中世・宗教改革期・バロック期を通しての，宗教的なものと俗世的なものの微妙な混在・混淆が私の研究テーマであるハプスブルク宮廷の中世的遊戯性の伝統とも重なると実感した。

5. リンツ城博物館および市内の見学

リンツ城博物館では中世からバロック期の展示室を中心に鑑賞。中世後期のゴシック芸術のコレクションのレベルが高く，展示の解説が良い。主に 15 世紀のキリストの受難と，聖母マリアの悲しみや気高さを描く木彫が，質量ともに良いと感じた。コレクションは 1517 年のルターの宗教改革の前のあたりが多く，キリストと聖母マリアを抱えるマリアの母アンナの像が多く展示されていた。展示の仕方として，インスブルックのアンブラス城や，ベルヴェデーレ上宮，グラーツ市博物館のように，積極的なテーマ設定や，メッセージ性のアピールは少ないが，ゴシック期から宗教改革期（あるいはルネサンス期）の微妙さが，良く表れているように思った。

このリンツは，都会でビジネスや産業主体のイメージの街なので，なかなか中世的なものは無いと思ったが，街の散策でも収穫があった。駅から城の博物館に行く途中，マリア教会でミサに立ち会った。100 年前の 1924 年に完成した新しい教会で，ステンドグラスが見事である。ミサでは端で立っていたが，聖職者の話とオルガンと賛美歌に，やはり中世的な感覚がまだ生きていると感じた。旅の途上に，厳粛な気持ちになった。Christus werde uns.（キリストが我らに現れますように。）というフレーズが繰り返されたが，これがミサの意義の全てを象徴していた。

6.ウィーンのフロイト美術館の見学

フロイト博物館はウィーン大学のすぐ近くにある。フロイトはナチスの迫害を逃れ1938年にロンドンに移り，そこで亡くなったので，家財などめぼしいものはロンドンのフロイト博物館にある。（私もたまたまそこを訪ねたことがある。）ウィーンのフロイト博物館は，彼の家と診療室の場所そのもので，その空間性こそが「売り」と言える。建物に入ったところに，フロイトや精神分析の関連図書がまとめてたくさん売られていた。最近の本がいろいろあり，私も資料を購入した。

フロイトの娘アンナ･フロイトは，戦後のアメリカの精神分析界の大御所になった人で，少女時代の彼女の写真や成人してからの手紙などもあり，読んで回った。またフロイトは，1920，1930年代の欧米の王室から超一流文化人とのネットワークをつくり，そしてユダヤ･コネクションがあり，何より彼の著作の魅力によって非常な影響力を持ってきたと認識を深めた。

7. ウィーン美術大学美術館の見学

ウィーン美術大学で中世からバロックの絵画のコレクションを見学した。芸術学生への教育を意識してか，時代・ジャンル順に分かりやすく収蔵品がならび美術史を理解しやすく，興味深い。数日前のリンツではたくさん聖母像，聖母子像を見たが，そのときは木彫が多かった。ここでは中世後期のイタリア絵画，バロック期のフランドル絵画など，オーストリア以外の華麗な美術品が多く，改めてハプスブルク･コレクションの国際性を痛感した。ハプスブルク家はドイツ･オーストリアの支配者としてと，16世紀あたりからのヨーロッパ全域，アメリカ大陸，アジアに及ぶ世界帝国の支配者，としての二つの顔があり，それぞれの美術館の力点は異なる。この美術大学の美術館では，ドイツ系のバロックとしては画家クラナハの存在が強調される。国際的には，やはりルーベンスは圧巻だ，と改めて考えながら見て回った。

8. 分離派会館（ゼセッシオン）の見学

クリムトらの拠点であった分離派会館を見学。ヘッドホンでベートーヴェンの第九を聞きながら地下室内の壁画を鑑賞。クリムトの作品はベルヴェデーレ上宮にも所蔵され有名である。ベルヴェデーレ宮殿は「オーストリア」にこだわる，と先に書いたが，ゆえにクリムトの作品が目玉になる。つまりハプスブルクの偉大な街でありながら，世界的な絵画の傑作は，その帝国の支配下にあったフランドルや（「ローマ皇帝」として繋がりが深い)イタリアのものが多いのであり，生粋のオーストリア，ウィーンの画家の代表的な例としてクリムトの扱いは大きい。それはオーストリアにおける美術をマクロ的・通史的に見た際の，美術史の一部としてのクリムトの捉え方である。しかし分離派会館は彼の感性を体現する独立した空間である。ある意味で近代的な理性主義への反発と性本能の芸術的昇華を通じた解放であり，そこに私はフロイトに見られるのと似た，広義での中世回帰を感じ取る。その壁画の断片性には，未完の芸術的世界への誘引力が働く。

なお，この建物の売店でウィーンのユダヤ系文化人についての書籍を購入した。

9.自然学美術館の見学

美術史美術館（Kunsthistorisches Museum）の真向かいの，自然史博物館（Naturhistorisches Museum）を訪問。両者は外形的に全く同じ形の宮殿。日本では前者が圧倒的に有名で，後者に行く人は少ない。ベルリンの自然学博物館（Naturkundemuseum），上野の国立科学博物館と比べて，ウィーンの自然史博物館も展示内容として共通点が多いが，以下のような違いがあると感じた。それは自然や動物への「愛」を強く感じる部分である。ベルリンは学術的･客観的。ウィーンは，宮殿美術と自然史が混ざり合う。進化論を踏まえているが，霊長類としての進化の先の人間への移行と文化の誕生，という連続を丁寧にとらえ，さらに先史的，民俗学な収蔵品に，文化の生な姿を見る。ウィーンの人文系学問の根底に共通する，太古の生物・先史の文化と，「今」の人間と不可分な関係，もっと言えば神の被造物としての共通性ゆえの「愛」があるように直感的に感じた次第である。かねて動物行動学の研究でノーベル賞を受賞したコンラート・ローレンツに関心を抱いてきたが，動物たちの世界への深い関心と理解は，オーストリアにおけるこのような動物観・人間観を背景としている，という新たな認識を得た。

10．ウィーン大学にて

ウィーン大学では独文学図書館および美学図書館にて資料の検索を行った。

また比較法学の学会の発表も聴講した。（その場で主催者にお願いし許可を頂いた。）独占禁止法関連の話で，チリの女性研究者と，オーストリアの公取委の担当者の話を聴いた。この手の話は，自由競争と，事業者，消費者の保護，という対立する要素の調整という関連になるのは最初から明らか。その上で，国や地域によって，誰を守るかの力点は微妙に変わる。米国と中南米もやはり，社会的政治的コンセンサスの重心は違う。EU について，オーストリアの例からフェアネスの概念がますます強調されているが，何をもってフェアかは定義がきちんとなされていない，というのが公取委の方の話。どこでやっても同じような議論になるが，ただ EU の場合は国内法に加え EU 法があり，比較法学は日本以上に意味を持つ身近なテーマ。

議論は英語だったが，ウィーン大学で EU 法関連のレクチャーを受けたことは良い経験となった。というのもウィーンを長く支配したハプスブルク家の帝国は多地域，多民族を包摂した超域的統治システムで，EU のそれと類似する部分が確かにあるからである。18 世紀以降の国民国家主義，更には過度な民族主義を共通のルールによって包摂していこうとする知恵は，中世以来の帝国の伝統に，少なくとも外形的には，類似するからである。

11．オーストリア人の研究者と会合および意見交換

オーストリア文学の研究者ヴァルター・フォーグル氏と会合。現地についての情報交換と，今後のオーストリア文学研究に関する学会活動の予定についての打ち合わせもし，今回の研究テーマとも絡めた形での研究発表案を話し合い，それに合わせてウィーン市内の書店で必要な文献を購入した。

12. ウィーン美術史美術館
美術史美術館見学。オーストリアの他の都市の美術館を見てきた後で，この美術館の建物と収蔵品の質と量に改めて圧倒された。ブリューゲル父の絵画は 16 世紀に描かれたが，しかしかつての中世の遊戯性を作品の中に受け継いでいる。それらはウィーンではなくフランドル地方で描かれたものであり，まさにホイジンガが『中世の秋』に描いた中世の文化の息吹を引き継ぐ。もっともこの美術館の展示の目玉はやはりバロックの絵画であり，その迫力に圧倒された。本来，ドイツ語圏では暗い時代が続いた 17 世紀であったが，北イタリアやフランドル地方を支配したハプスブルク家は，ルネサンスからバロック期の国際的な名品を集めている。また，この美術史美術館でもルネサンス以来の宗教画に着目し，聖母子の絵をいくつも撮影した。とりわけリンツ城博物館で見た聖母子像などと比較し，美術史美術館における特徴を捉えるためである。

13. 国立歌劇場にて『カルメン』を鑑賞
国立歌劇場にて『カルメン』を鑑賞した。演出はかなり現代的で型破りであった。登場する男性たちは 1980 年ごろのアメリカの若者のいでたちで，兵隊たちは GI の恰好，大きな「アメ車」がたくさん出て来る。ウィーンの国立歌劇場は過去にも何度か来ているが，常にクラシカルで，こういう現代的演出を私が見るのは初めてであった。

14. 国立歌劇場にて『椿姫』を鑑賞
『椿姫』を鑑賞。前日のカルメンも 1980 年アメリカ，という感じだったが，この日の椿姫は完全に現代。出だしから，巨大なスクリーンがゆっくり舞台を回り，女性の顔面や眼，そして SNS の絵文字いりのドイツ語チャットの文面がずらずら走る。服装も完全に現代。ウィーンの国立歌劇場で，コロナ前の 19 年 9 月に椿姫を見て，そのときは完全にクラシカルだった。2 幕までは，私もいろいろ考えて，明らかに封建的なストーリーに潰される愛なのに，現代に置き換えては辻褄が合わないのでは，と考えた。あと日本のポップアート的な感覚は，随分とウィーンの現代芸術に入ってきているな，とも感じた。（これは今回の滞在で時折抱いた印象でもある。）しかし 3 幕が始まって，ヴィオレッタが危篤になり，ジェルモン，アルフレード父子がベッドサイドに来るあたりで，死を前にしたこのヴィオレッタの孤独感が，現代的感覚でひしひし伝わり，場内から鼻をすする音がして，絶命の場面は，こちらの世界の裂け目から，光の国に消えてゆく，という演出。とにかく 3 幕で，演出に納得が行く。もちろんスタンディング・オベーション。やはりヴィオレッタにぐっと来た。それにしても，椿姫は何度か見たが，不思議な作品だな，と。あれは，女の意地なのかな，などいろいろ考えこんだ。二日続きで『カルメン』と『椿姫』という（女性像という意味では）正反対の物語を見た。周囲に座るウィーンの地元の女性たちとも作品について

評し合ったが，彼女たちの感想を聞けたことは，これらの演出が如何に地元で受け止められているか（あるいは反発を受けているか）を知る良い機会であった。

７　研究結果・成果

１．オーストリア各地の芸術展示の特徴と比較

各地の芸術作品展示は，それぞれに「得意分野」がある程度分かれていて，その「棲み分け」の特徴も感じられた。とりわけ，近年のオーストリアにおいては政治的に右派さらには極右政党が勢力を伸ばしており（2024 年 9 月末の選挙で更に明瞭になった），それは伝統の重視と強調を意味するが，しかしそのような動きとは別に，様々な宗教的・文化的バックグラウンドを持つ人たちを如何に包摂してゆくか，という問題は各美術館・博物館においても強く意識されているように感じた。（たとえばグラーツ市立博物館では，中世におけるグラーツの街での宗教的多様性を示す展示がなされていた。インスブルックのアンブラス城博物館においても，バロック時代におけるこの城の宮廷での多様な身体的特徴の人々の存在を示す展示がなされていた。）

もう一つ，美術館・博物館展示におけるコンセプトの変化としては，鑑賞者自らが体験し，そして自らが考えるように仕向ける，という傾向が多くの展示において意図されていることである。（ベルヴェデーレ宮殿における近年の中世展示について，そのような意図を学芸員の方から説明いただいた。）

これらの展示について，各地の施設で（許可されていることを確認したうえで）写真を撮影し，視覚的な研究資料を集めることができた。またそれらの施設の売店で資料となるカタログや解説本などの図書も購入し，帰国後の研究の準備も行えた。

２．ベルヴェデーレ宮殿の中世作品展示について

今回とりわけ私が調査したことは，ウィーン美術史美術館とベルヴェデーレ宮殿の役割分担についてである。詳しくは今後に発表するレポートやプレゼンの中で報告するが，この二つの美術館はオーストリアを代表し，その位置づけはウィーンを長く都としてきたハプスブルク家の歴史と切り離せない。そしてそれは，オーストリアの支配者としてのハプスブルク家と，広くヨーロッパ各地，更にはアメリカ大陸やアジアにまで支配地を広げた世界帝国としてのハプスブルク家，という二つの面があることに起因する違いであると言ってよい。ベルヴェデーレ宮殿は前者の面，すなわちオーストリアの支配者としてのハプスブルク家の芸術蒐集の歴史を強調する。そして，その宮廷的な芸術展示の枠組みの中で，15 世紀以前の中世芸術をいかに位置づけるのか，という問題について調査し考察した。この部分については，既に 2024 年 9 月に日本大学法学部の論集に原稿を寄稿し，また 2024 年 12 月に開催される国際アーサー王学会日本支部においてベルヴェデーレ宮殿における中世芸術展示についての口頭発表で報告する予定となっている。

3. 中世から現代に至る文化的包摂の伝統について

中世以来の騎士文化・キリスト教文化の伝統を継いできた帝国の都でありながら，ウィーンは同時にしばしば最新のモダンな文化を生み出してきた。新旧，自分たちの地域・ヨーロッパ全体，という複合的な対立項を独自の文化的風土の中に調和させてきた。公的機関には，ヨーロッパ連合の旗が国旗や州旗と一緒に掲揚されている。国旗には鷲の紋章が使われているが，これは言うまでもなくハプスブルク家の紋章に由来する。

現在の共和国体制において，ハプスブルク家の存在を強調することについては一定の配慮を要するのであろうが，しかし同時に，特にウィーンにおいてはその存在を依然として強く感じさせられる。その帝国を支えてきたユダヤ系の住人たちの生活や社会における位置づけについても私は関心を持ち，図書資料を見つけては購入した。昨年に科研費プロジェクトの枠組みでウィーンに来て調査を実施した際に，ユダヤ博物館を見学して，この街における中世の痕跡をユダヤ系の団体が積極的に保存し，中世以来，ウィーン市においてユダヤ系住民が常に街および帝国の発展に寄与したことと，迫害も受けてきたことを社会に伝えようとしていることを知った。今回の派遣では，この点についても常に意識して各地の展示を見学していた。国境を越えたネットワークによって経済活動を行ってきたユダヤ系住民の存在は，諸民族を包括・包摂するハプスブルク帝国の国際性とも，また国際連盟・国際連合の成り立ちや歴史とも深く関わっている。このあたりの問題については，次年度に向けて申請を提出した科学研究費補助金のプロジェクトで更に検証してゆく予定である。

以　上